［研究ノート］

興福寺と聖徳太子信仰

――造形と文献より――

多川文彦

一、はじめに

令和三年、聖徳太子御遠忌一四〇〇年を迎えた。聖徳太子所縁の場所では種々法要などが厳修され、その遺徳を讃える行事も数多く行われている。倭国の教主と言われ、日本仏教の礎を作った聖徳太子は、法隆寺や四天王寺の仏教文化のみならず、後世の聖徳太子信仰の隆盛と広まりにおいて、宗派の垣根を超えた強い篤信でもって崇拝される。その最たる例は親鸞による六角堂夢告における、観音の化身たる聖徳太子の導きによる法然との邂逅、そして念仏教団としての浄土真宗を作り上げるにあたって、聖徳太子に対する格別の信仰を集めたことは著名である。本稿では、興福寺に所蔵される聖徳太子立像（二歳像／南無仏太子像）を嚆矢として、興福寺の太子信仰の様相について、資料の整理と共に若干の考察を加えることを目的としたい。

二、興福寺所蔵の聖徳太子立像（南無仏太子像）

南無仏太子像は『聖徳太子伝暦』に記される、太子が二歳の時の春、東を向いて合掌し、「南無仏」と唱えたとする伝承をもとに姿を表したものである。[1] 彫刻作品は、種々の聖徳太子絵伝に描かれる「長い裾の緋袴をは

いた太子が立って合掌している姿」を原型として彫像化、制作されたと考えられている。最も古い例として、源実朝が承元四年に持仏堂において南無仏の御影を供養した記事が知られるが[2]、鎌倉時代前期に遡る現存作例は知られず、現存の彫刻作品としては鎌倉時代の半ばを過ぎてから、具体的には正応五年（一二九二）の作例を最古とする。そして、主として鎌倉時代末から南北朝時代にかけてその造立が盛んになる。その要因は、例えば南無仏と唱えた太子の手中から舎利が出現したとする説話内容をはじめとして、太子信仰と釈迦・舎利信仰、また宗派の垣根を乗り越える複合的な聖徳太子信仰が隆盛した時代背景が考えられる。興福寺に伝わる像も同様であろう。

興福寺に現存する聖徳太子立像（二歳像、南無仏太子像。以下「本像」と表記。像高六八・〇センチ）は、国宝館の収蔵庫に保管され、かつては常設展示されていた【図①】。一方、長らく寺外への展観に供されることがなかったが、二〇一七年に開催された中金堂の柱絵完成を記念する展覧会に出陳されている。展覧会図録の解説内容は以下の通りである[3]。

聖徳太子は二歳の時、東を向いて合掌し「南無仏」と唱えたという。袴をはき上半身が裸の幼児の姿で表される。太子二歳像は文献上では鎌倉時代前期にみられるが、実際の作例が残るのは鎌倉時代末期から。以後、太子信仰の隆盛とともに制作が流行した。この像は聡明で愛らしい幼児太子の姿が的確に表現されている。

数多く残されている南無仏太子像の中でも比較的状態が良好である。かつて国宝館において展示されていた当時に掲出されていた本像の解説文にも「この像は入念な仕上げ」で、愛らしい太子の姿をよく表しているとする一方、制作年代を江戸時代（十七～十八世紀）としている。南無仏太子像は顔貌の表現や体躯の大小に様式的な差異や時代変遷がみられるものの、直立して合掌、上半身裸形で袴を穿く姿、像高の高低にあまり差がなく、どの時代の作例においても形式は比較的平準化している。

図像的差異が少ないといった状況で、本像は果たして単純に江戸時代の作例と断言できるのであろうか。そういった問題意識の下、本像の特色について考察し、その制作年代について検討したい。

本像検討の前に、鎌倉時代の古い作例を順に確認したい。[4] 先に述べたように現存最古の像としては正応五年（一二九二）の年紀を有するアメリカ・ハーバード大学美術館の南無仏太子像である。像内に納められた愛染明王坐像などの小さな仏像、宋版法華経などの経典類など夥しい納入品の中に年紀を有した結縁者による願文も含まれており、その頃の制作と考えられている。

ついで正安四年（一三〇二）の墨書銘をもつ奈良・大久保町観音堂に安置される南無仏太子像である。瓢箪型の頭部が印象的で、眉と目を吊り上げ、上体をやや反らして立つ。前後に矧ぎ、内刳を施して割首、両手や袴裾などを刳り寄せる寄木造の像である。

奈良・伝香寺に伝わる南無仏太子像は嘉元二年（一三〇四）の年紀が像内に納入された文書から判明している【図②】。同文書には「大仏師舜■（慶カ）」「東明寺順賢」「僧盛舜」などの名が見られるが、それ以外の伝来や造立事情などは判明していない。長谷寺本尊の十一面観音立像脇侍の難陀龍王像（正和五年／一三一六）を手掛けた舜慶と同一仏師とする意見もある。納入品については他に舎利容器や法華経、真言陀羅尼といったものが含まれ、円成寺像と共通する。桧材の寄木造、前後二材を矧ぎ、まっすぐ連なる眉と精悍な相貌が特徴的である。

徳治二年（一三〇七）の造立銘をもつ法隆寺所蔵の像も前後二材矧ぎで、内刳りの上、割首する。吊り上がる眉と鋭い目つきが特徴的である。両肘以下、袴の裾からのぞく両足先や袴裾の後方、彩色などは後補である。室町時代の『太子伝玉林抄』や江戸時代の『古今一陽集』などには橘寺の敬願房の発願で仏師丹好が制作し、法隆寺の新堂院に安置されたとする南無仏太子像の存在が記されるが、確証が得られていない。これとは別に、十三～十四世紀の作とされる南無仏太子像が法隆寺東院の舎利殿に安置される。緋色の袴を穿いて上半身は裸形、胸の前で合掌する通例の姿で表される。丸々とした頭部と

肉付きの良い体躯が印象的であり、長方形の箱状台座に、裳裾の形に合わせて立たせており、裳裾部分が見えないが、像底にある蓋状部分に何らかの納入品を納める仕様になっている。[5] いずれも安置された時期や来歴などは不明であるが、明治期の記録写真には、南無仏舎利と共に東院舎利殿像とみられる像が残っている。

延慶二年（一三〇九）の年紀を持つ奈良・円成寺像も前後二材矧ぎで、後補の部分もあるが右腰に垂れる袴の結び紐は当初のものとされる【図③】。端正な相貌、明快かつ整った体躯をしており、湛幸が制作した兵庫・善福寺に所蔵される南無仏太子像に通じるとする意見もある。像内納入品には僧俗男女百余名の結縁者が記され、その中には東大寺や興福寺の僧の名も見えるという。さらに法華経や勝鬘経、維摩経、法華経などの経典類、五輪舎利塔、如意輪観音印仏、五大明王の図像、真言陀羅尼など夥しい量の品々が納入されている。[6]

善福寺像は像内に「法印湛幸」の墨書があるが、制作年を示す年紀が記されていない。ただし、慶派仏師の直系と見られる湛幸は永仁二年（一二九四）に佐賀・圓通寺二天像の銘記にその名が見え、また元応二年（一三二〇）に仏光寺の聖徳太子孝養像を手掛けている点に注意したい。全体として整理された体躯の表現、胸部の張りや額の大きさ、利発な相貌から円成寺像と共通する部分が多く、おそらく近い時期に制作されたものと思われる。

ＭＯＡ美術館所蔵の南無仏太子像は、像内の墨書から元応二年（一三二〇）三月に康俊によって制作されたことが知られる。もとは東大寺に伝来したと言われ、また康俊も興福寺大仏師を名乗って活躍し、多くの作例が知られている。眉をひそめ、眉間に小さな窪みを作り、やはり初期像に見られるような厳格さがみられる。また、袴の衣文は足を踏み出すことによる乱れを作りながらも整理され、扇形に広げる裾をもって安定感を保っている。ＭＯＡ美術館像の袴の表現で近似しているのが奈良・元興寺に伝わる南無仏太子像である【図④】。やはり眉をひそめ、袴の張り出しがやや大きくなるものの、胸から足にかけて張りのある体躯の作り、像高などが共通する。元興寺像の作者や年紀などは解っていないもの

の、様式の共通項から作者を康俊とする可能性も考えられよう。南無仏太子像の初期（十四世紀前半）と考えられる作例はこの他にも奈良国立博物館像や鎌倉国宝館寄託の個人蔵像、大阪・四天王寺像、京都・宝菩提院像、奈良・法起寺像などがあげられるが、いずれもその相貌に幼さはあまり見られない。

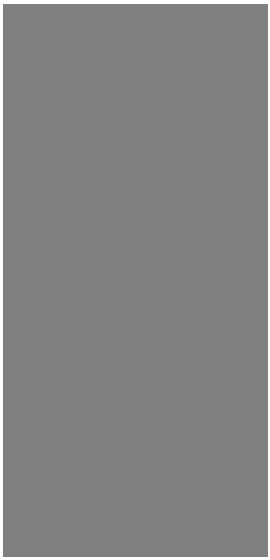
一方、続く元亨元年（一三二一）の年紀を持つ滋賀・国分聖徳太子会蔵の南無仏太子像は、法眼宗円が制作したことが像内に納入された願文から判明している。像高がやや低く、そのためか手足がやや短くなり、何より太子が穿く袴が紙風船のように膨らんだ表現が特徴的である。この特色は奈良・法輪寺像にも見られ、また顔つきも初期の像と比べ、非常に穏やかに、また幼児化が見られる。初期の像は眉を吊り上げ、威厳を超えた怒りの形相を取る像があるなど、二歳時の相貌と思えぬ表現様式が見られたが、元応三年から元亨元年にかけて、南無仏太子像の様式に変化がみられるようになる。(7)

以上の様な初期の南無仏太子像の特色を鑑みた時、興福寺に伝わる南無仏太子像の持つ表現を観察すると、中世まで遡れる作風を有していると思われる。(8)

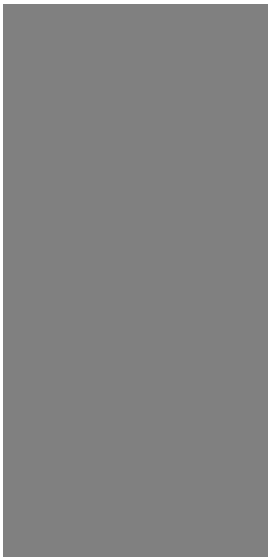
本像の頭部は円頂とし、頭髪部分に薄墨を施す。髪際線を表し、濃淡でもって面相部分と区別する。目鼻を中央に集中させ、眉間を弱めに窪ませ、連眉を浅く彫出して淡墨で毛描きする。眉はやや吊り上がるが穏やかさを残す。眼は深く彫出せず玉眼を嵌入する。やや切れ上がった目で上瞼をくっきりと彫出し、眼球を下向きに表し、思惟するかのような表情を浮かべる。それに伴い、鼻梁は初期像ほど太くは無いが高くスマートである。唇は閉じつつ上唇を山型にして口元は南無仏の無の字を唱える如く彫出し、唇には朱の彩色が部分的に残る。あごの肉取りにふくよかさが認められ、耳朶はやや膨らませながらも平面的である。腰下部より朱の彩色を施した袴を着用し、裳裾が一部欠失している。緋袴上部の彫りは浅く精緻に、下部に向かって彫りを深くする。材はヒノキと思われ、寄木造、両耳後方を通る線で前後二材を矧ぎ、首の線で割首し、両腕は肩、合掌手は両手首でそれぞれ矧ぐと思われる。なお、像底には台座に差し込む円形の枘がある。以前は木製の台座（後補）に据え付けら

れていたが、現在は展示用台座に据え付けられている。全体として、初期像に見られるような眉根を寄せ、眉尻を吊り上げた怒りの形相をしめすものではないが、いかにも二歳児という相貌でもなく、幼児化する一歩手前の過渡期を示す姿となっている。胸部・腹部に対して頭部をやや大きめに彫出し、合掌する両腕や体躯全般にやや肉付きがよく、端正でスマートかつ安定感のある姿でバランスよく仕上げられている点は、伝香寺像や円成寺像、元興寺像など南都ゆかりの寺院に伝わる十四世紀の作例と共通する部分が少なくない。

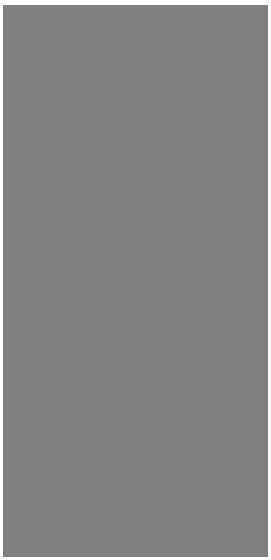
ただし、頭部と体躯の現状に、差異が認められるのも事実である。体躯には朽ちた部分や補修痕、汚れなどが多数みられるのに対し、頭部、特に顔面部の状態が極めて良好でクリーニングを施されたかのように残っている点が、今後検討を要する箇所であろう。修理記録などが残っている状態ではないため、現段階で詳細は明らかにし得ないが、しかしそれを措いたとしても、江戸時代に下る作風では無く、鎌倉〜南北朑の表現を包含する貴重な作例と言えるのではないだろうか。



図①　南無仏太子像
（奈良・興福寺蔵）



図②　南無仏太子像
（奈良・伝香寺蔵）

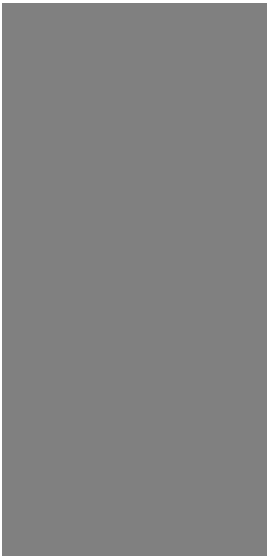


図③　南無仏太子像
（奈良・円成寺蔵）

三、興福寺と聖徳太子

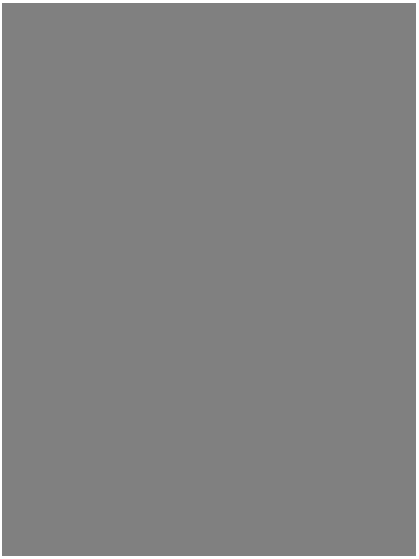
聖徳太子に少しでもかかわりのある寺院には、所縁のある仏像や伝承が縷々残っている。興福寺には重要文化財に指定される『聖徳太子伝暦』【図⑤】が伝来する。(9)

『聖徳太子伝暦』自体は十世紀後半頃に成立したとされ、太子父母の成婚から蘇我氏滅亡までの編年体で記される。『日本書紀』や『日本霊異記』、『上宮聖徳太子伝補闕記』などを参照しつつ、太子の常人ならぬ姿、前世・未来の記述に加え、独自の情報記事を加えることで後の太子伝に大きな影響を与えた。数多くの写本が上下二巻であるのに対し、興福寺本の特色は上下本末の四帖の構成をとる。現存最古の写本は貞応二年（一二二三）の年紀をもつ宮内庁書陵部本、乾元二年（一三〇三）に恵厳が法隆寺西室にて書写したと言われる徳島・本願寺本、神奈川・清浄光寺には下巻のみの残存だが、嘉暦元年（一三二六）の年紀と寂静筆といった書写筆者が判明する写本が所蔵される。一方、興福寺本は徳治二年（一三〇七）に、良厳が太子生誕の地とされる菩提寺の橘寺・往生院にて多本を校勘し、偽りを棄てて真を採って



図④　南無仏太子像
（奈良・元興寺蔵）

図⑤　聖徳太子伝暦（奈良・興福寺蔵）



図⑥　聖徳太子伝暦・興福寺本の奥書

書き写したことが記される【図⑥】。年紀と書写した僧侶の名が判明している、鎌倉時代の古写本として大変貴重なものである。顕真の『聖徳太子伝私記』において橘寺が法隆寺の根本末寺であった旨を記すことから、直接示唆する史料は無いものの、法隆寺を通じての文化交流はある程度あったものと思われる。また、書写年代がちょうど南無仏太子像が作られ始めた年代と重なるため、その因果も想定されよう。

『太子伝玉林抄』巻三に記される太子八歳の条文には、『障子伝』を典拠として以下の内容が記される。[10]

障子伝、云是尺迦三尊像初五台山所移之像也。其始百済国王崇之。次新羅王貴之。今吾朝日本写移貴敬之、時蘇我大臣建立本元興寺、安置此像、拝見之貴賤必感其恩彼寺已後、今興福寺大伽藍東金堂奉安置之。後戸東ニ坐マス是也云々

興福寺の東金堂は薬師三尊を本尊として、周囲に文殊・維摩、そして十二神将などが現存像として残存している薬師霊場の空間であるが、太子八歳条にある釈迦像については、『興福寺流記』にある東金堂後戸の記事にも詳細が記される。[11]

東金堂後戸釈迦三尊。金銅躯脇侍観音虚空蔵。〔東大寺大仏移之云云〕

太子伝云。八年己亥冬十月。新羅国献送仏像。太子令皇子奏日。西国聖人。釈迦牟尼仏遺像。末世尊之。則銷禍蒙福。蔑之則招笑縮壽。児読仏経。

其旨微妙。望也崇貴仏像。如説修行。天皇太悦。安置供養。今在興福寺東金堂。或元興寺。障子伝云。太子八歳時大臣諸卿等。奉謗太子。群臣朝参時。太子天皇後蔵聞之。天皇詔云。太子近来何事努給。答申何事候。外国仏法云物持隋崇代極不穿之由奏之。時太子言群臣。仏法因果已偏所談申也。是釈迦三尊像。初五台山移所像也。其始百済国王崇之。次新羅王貴之。今吾日本移貴敬之。時蘇我大臣。建古立本元興寺。安置此像。拝見貴賤。心威其恩。彼寺已後。今興福伽藍。東金堂奉置者也。後戸東座是也。今度日記云。件像。自新羅国所貢仏也。前前炎上之時。皆以奉取出畢。而今度不能奉取出。中尊無首。脇士両躯。或全体破損。或半身損壊。又同堂正了知大将。奇代霊像也。寛仁炎上之時。自踊出。時人号之云踊大将。而今度大十師弁基。纔奉執出御首。

また、近世の編纂になるが『興福寺濫觴記』の東金堂条によると、次のように記される。(12)

本尊　金銅薬師如来　坐像　御長八尺
脇士　日光菩薩　月光菩薩　各立像　御長七尺五寸

薬師三尊の他、十二神将、文殊、維摩、四天王などの像を列記し、その後、地蔵、不動明王、雨宝童子を記載し、「聖徳太子　上古像　立像」とのみ太子像の存在を記している。しかしながら、他の像と異なり、寸法の明記が無い。『興福寺濫觴記』ではその後、同（東金堂）後堂東面の記事として、金銅釈迦如来と脇侍に観音・虚空蔵を記載し、この三尊が「本朝新羅国奉献之霊像也」と記録する。

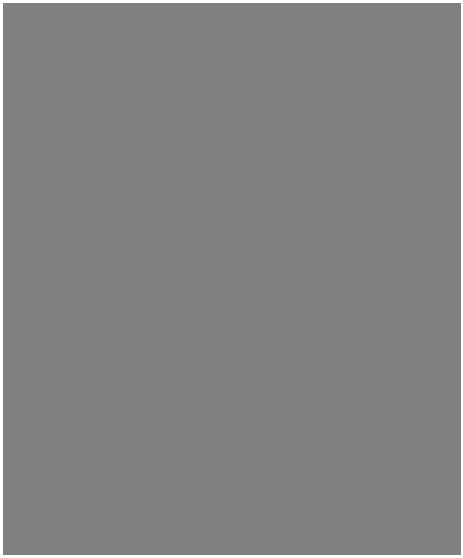
さて、第二節で確認したように、興福寺に現在唯一残る聖徳太子の像だが、『興福寺濫觴記』に記されるところの像と同一かということについてはにわかに信じ難い。「上古像」であり「立像」であることは記されるものの、当像のみ像高が記されず、それ以上の情報が無いことが要因の一つである。なおここで確認しておきたいのが、興福寺の仏像群が明治初めの廃仏毀釈に伴い寺外流出の憂き目に遭った事である。この出来事はあまりに

著名であり、その後の復興が認められたものの経済的な困窮により、破損仏を中心に有力な実業家などへ譲り、興福寺維持のための資金を得る動きがあった。明治三九年（一九〇六）七月に興福寺本坊内にある土蔵前にて、三井財閥を作り上げた実業家の益田孝（鈍翁）の弟である益田英作に譲渡される前に撮影された古写真が二枚伝わる。その内の一枚に【図⑦】、正面を向いて閉口し、頭髪を中央で左右に分け、角髪を結う聖徳太子立像の姿がある【図⑧】。明治二十年に興福寺が奈良県に提出した目録に「聖徳太子立像一体（中略）長サ二尺二寸」にあたる像で、鎌倉～南北朝時代の作と想定されている像である。[13] 残念ながら現在の所在は不明であるが、古写真に写る像と、現存する南無仏太子像の存在は、興福寺と太子信仰を考える上でも貴重である。

＊

また、東金堂との関係については、新羅から賜ったとする金銅釈迦像の関わりから太子との由縁も読み取れるが、後述するように、興福寺内にて年中執行する寺内法会としての記載は見当たらず、あくまで個々の信仰に委

図⑦　譲渡前古写真（奈良・興福寺蔵）



図⑧　図⑦古写真に写る聖徳太子立像

ねられていたことが想像される。解脱上人貞慶の太子信仰もその一例である。様々な法会や講の次第などを記した「講式」の類にもその名の如く『聖徳太子講式』を著しており、[14]『観世音菩薩感応抄』にも観音の生身としての聖徳太子を日本の釈迦と位置づけ、多少の違いを認めつつも浄土へと引接する由を詳述する。[15] 建仁元年の『観音講式』においても、仏法の興隆から伽藍建立、僧尼出家などを聖徳太子の業績として挙げ、仏舎利および浄土への憧憬を記している。[16] 貞慶の記した夥しい唱導資料においても多くの太子信仰またはそれに関わる言説が数多く残されていることに注意を払いたい。

具体的な聖徳太子に対する思慕について、中世興福寺を語る日記類ではどのように記されるか。『大乗院寺社雑事記』[17]には聖徳太子の月命日である廿二日条に、「講問一座予行之、太子法楽」や「講問一座予行之、上宮太子法楽、極楽坊修正牛玉等到来」と言った記事が度々記載され、『多聞院日記』[18]においても同様に散見される。

①永禄九年正月廿五日
　勧修坊太子講被始之、出仕了、来題、

②永禄九年八月廿二日
　論へ出了、於勧修坊太子講在之、来題乃至未断

③天正十六年閏五月廿二日
　太子講無重可執行旨被申間出了、講予、問者南井坊、題遺相初方、自所余法、日中飯被　了、フセ五疋ツ、拝領之

④天正十六年十一月廿二日

太子講出了、題遺虚第三方、他方仏土量、講予、
問者南井坊、餅ニテ酒在之、五疋フセ来

このように、度々、聖徳太子に対する供養を行っていたことが解る。しかし、先述の通り、内閣文庫『興福寺年中行事』を確認してみると、寺内において太子を講讃する法会や行事に関しての記載は見当たらない。[19]そのため、寺全体の法会ではなく、あくまで子院・個人レベルにおける小規模の講が行われていたものと思われる。

その他、『大乗院寺社雑事記』の延徳二年九月廿八日条には、

絵師大輔法眼召之、祖師之内聖徳太子大略書継、淄州大師座具、以下書継之、恵灌僧正以下ハシ、、書加之

『多聞院日記』の天正九年九月十日条には、

太子ノ表補良春申間、八升ニテ慶禅沙汰之、出来了、経フセニ立用且遣之

といった記載が見られ、聖徳太子影の存在もうかがわせる。更に『大乗院寺社雑事記』の文明十九年七月には、連続して二歳像に関する記載が見られる。

①文明十九年七月四日
昨日高野聖二歳太子持来、二尺計也、可買徳之由仰之了、書付宇治之橋本尊也、可送彼寺也

②文明十九年七月八日
宇治橋寺放生院、太子今日奉返入者也、去三四日此盗人取之之由、自地蔵院申入之、春円大参申、畏入云々

③文明十九年七月九日
宇治地蔵院返事到来、春円大取進之、太子寄進事、畏入旨申入了、春円江瓜十籠進上之

これらの記事と、現存する南無仏太子像との因果関係は見出せないが、後考の材料として提示しておきたい。

四、まとめに替えて

これまで見てきたように、興福寺には聖徳太子に関する造形作品や典籍、記録類が残存するものの、基本的に個人、または子院レベルでの信仰に委ねられる状況がうかがわれた。一方、中世の興福寺が太子創建の法隆寺の別当職を掌握していたことには注意を払いたい。既に先学によって詳細に言及されているように、中世の法隆寺は法相・三論を学ぶ場として、一時はこれに真言や因明なども加わり、学問寺院としての役割を果たしていたが、興福寺の琳元が法隆寺別当に就いて以降、強い支配関係を構築していくようになる。特に治承大火以降の復興に携わった信円や覚憲が興福寺の別当職に就いた際、法隆寺における法会や行事にも関わりを見せ始め、その後の覚遍が法隆寺別当になると二十五年にもわたって在任し、両寺間での教学ならびに仏教文化の往来が盛んになったものと思われる。また、当時のキーパーソンである慶政の存在も重要である。[20] 以上、雑駁ながら、興福寺と聖徳太子信仰について、従来触れらなかったポイントに絞って資料を整理した。今後の研究序説として一旦擱筆するが、特に興福寺に現存する南無仏太子像の制作年代については中世に遡り得る作例として提示し、今後の検討材料として私見を述べるに留めておきたい。大方の御叱正を願う次第である。

註

（1）興福寺典籍文書第三函収蔵。該当の記事は「春二月…（中略）…始十五日、平旦、合掌東向称南無仏而再拝、不因人教」

（2）『吾妻鏡』承元四年十一月二十二日条「於御持仏堂。被供養聖徳太子御影南無仏。眞智房法橋隆宣為導師。此事日来御願云々」

（3）展覧会図録『興福寺の寺宝と畠中光享』（青幻舎、二〇一七年）

（4）列挙する初期像の特徴については大阪市立美術館監修『聖徳太子信仰の美術』（東方出版、一九九六年）の解説を多分に参考にしていることをお断りする。

（5）展覧会図録『聖徳太子と法隆寺』（奈良国立博物館・東京国立博物館、二〇二一年）

（6）杉山二郎「円成寺南無仏太子像」（『國華』八一六号、一九六〇年）

（7）前掲（4）と（6）の他、渡辺文雄「大分法専寺・康成在銘南無仏太子像をめぐって」（『大分県立博物館紀要』四号、二〇〇三年）、津田徹英「奈良国立博物館蔵　木造南無仏太子立像」（『美術研究』四〇一号、二〇一〇年）、石井千紘「作品紹介　個人蔵木造南無仏太子立像」（『パラゴーネ』五号、二〇一八年）などを参照。

（8）興福寺像の法量（像高以外・単位は㎝）は以下の通りである。

頂―顎	一五・六	面幅	一〇・五	面奥	一二・九
耳　張	五・一	腹奥	一三・一	肘張	一三・〇
胸奥左	一一・三	胸奥右	一一・五	腋下幅	六・八
裾張前	七・〇	裾張後	八・一	袴高	三七・五

（9）前掲註（1）。また、伝暦の成立、引用されている本願縁起と『四天王寺縁起』との関係性については榊原史子「『聖徳太子伝暦』と『四天王寺縁起』」（『四天王寺縁起の研究―聖徳太子の縁起とその周辺―』所収、勉誠出版、二〇一三年）にて論じられる。

（10）法隆寺蔵尊英本を参照（法隆寺編、吉川弘文館、一九七八年）

（11）『大日本仏教全書』興福寺叢書第一（仏書刊行会編）

（12）『大日本仏教全書』寺誌叢書第三（仏書刊行会編）

（13）山口隆介・宮崎幹子「明治時代の興福寺における仏像の移動と現所在地について―興福寺所蔵の古写真をもちいた実証的研究―」（『MUSEUM』六七六号、二〇一八年）

（14）本文は『聖徳太子全集』第五巻（竜吟社、一九四三年）などに所収。新倉和文「貞慶撰『聖徳太子講式』（五段）について」（『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』九号、二〇〇九年）

（15）新倉和文「貞慶著『観世音菩薩感應抄』の翻刻並びに作品の意義について―阿弥陀信仰から観音信仰へ―」（『南都仏教』九二号、二〇〇八年）

（16）山田昭全・清水宥聖編『貞慶講式集』（大正大学綜合佛教研究所研究叢書・第二巻、山喜房佛書林、二〇〇〇年）所収。その他、貞慶とのかかわりでは兼子恵順「笠置上人貞慶と聖徳太子信仰―『太鏡百錬鈔』所収の三種の資料をめぐって―」（『印度学仏教学研究』通号一〇七号、二〇〇五年）等も参照。

（17）以下、『大乗院寺社雑事記』は角川書店刊行本よりそれぞれ引用。

（18）以下、『増補続史料大成』（臨川書店）よりそれぞれ引用。

（19）内閣文庫本『興福寺年中行事』は大和文化研究会『大和文化研究』百十二号より五回にわたって翻刻が掲載される。本稿もこの翻刻を参照した。

（20）平岡定海「興福寺の法隆寺への進出」（『日本寺院史の研究（中世・近世編）』、吉川弘文館、一九八八年）

が最も示唆的な論であろう。また、慶政とのかかわりでは堀池春峰「法隆寺と西山法華山寺慶政上人」（『南都仏教史の研究（下）諸寺編』、法蔵館、一九八二年。初出は一九六三年）、近本謙介「南都復興の継承と展開―慶政の勧進をめぐる二つの霊託―」（『文学』第十一巻第一号、岩波書店、二〇一〇年）等を参照。

【図版出典】①飛鳥園提供、②③大阪市立美術館監修『聖徳太子信仰の美術』（東方出版）より転載、④元興寺文化財研究所提供、⑤⑥筆者撮影、⑦⑧興福寺架蔵写真

【付記】本稿を成すにあたって、特に第二節の分析については藤岡穣氏（大阪大学）、山口隆介氏（奈良国立博物館）にご助言を頂きました。末筆ながら深謝いたします。